

第3回エコエリアやまがた推進コンクール
優秀賞（山形県農業協同組合中央会長賞）
※掲載している情報は平成20年度時点のものです。

名 称	大江トマト倶楽部
所在地	大江町
<p>1. 取組の背景・経過等</p> <p>(1) 大江町では、平成2年から3名でトマト栽培に取り組んだ。取引先は大江町と従前から交流のあった埼玉県の生協で、出荷量の全量を値決め販売していた。</p> <p>(2) その後、生産者の離脱もあったが、JAさがえ西村山大江営農センターではトマトを野菜関係の振興品目として生産拡大を推進するため、新規就農者等に働きかけ平成10年度に計6名で、新生大江トマト倶楽部として新たな気持ちで栽培を始めた。</p> <p>(3) 平成11年までは、6月中旬から9月上旬までに収穫を行うハウス早熟作型であったが、価格や生協の要請もあり10月まで出荷できる夏秋作型への切り替える検討を始め、先進地視察研修を行うとともに、冬は会議と研修会を重ねた。</p> <p>(4) この結果、「適所適作」、「土づくり＝連作障害の回避」、「長期出荷」の3つに集約され、平成12年から取り組み始めた。</p> <p>(5) この土づくりに重点的に取り組んでいく方針や、生協との取引の中で、化学農薬の使用については当初からしぼり込みを行っていることから、エコファーマーの認定取得をJAより提案され、普及センターを含めて協議し、全員が取り組むことになり、平成13年6月に6名全員が県内初のエコファーマーとして認定を受け、近隣産地から一躍注目を集めた。</p> <p>(6) 平成20年度現在、会員8名全員がエコファーマーである。また、この取り組みが契機となり、大江町では現在、大江トマト倶楽部を筆頭に、大江ぶどう部、大江西瓜部、大江茄子部、枝豆部会大江支部、大江促成アスパラガス部会、大江桃部、大江南瓜部会の8部会会員全員がエコファーマーの認定を受けており、エコエリア大江町推進協議会が設立された。</p> <p>2. 農業経営・技術と取組姿勢</p> <p>(1) 環境に配慮した農業技術の実践と工夫</p> <p>ア. 土壌保全と適量施肥</p> <p>基肥を全量有機質肥料とするとともに、量をこれまでのほぼ半分に減らし、また、生育中に必要な施肥は、灌水と同時に毎日少しずつ必要な分だけ施用する、灌水同時施肥栽培を行っている。</p>	

イ. 減化学農薬の取り組み

灰色カビ病対策として、旋風扇を使ったハウス内空気の攪拌による耕種的防除を導入するとともに、微生物農薬（予防資材）インプレッション水和剤をいち早く取り入れて成果を上げている。また、通路に除草シートを導入し、除草剤に頼らない雑草対策を実現している。

ウ. 生産履歴の記帳管理

使用農薬については当初から記帳を行っている。また、新しい農薬については、取引先との協議を経ての使用可否を決める体制を取っている。

- (2) 家畜排せつ物、稲わら、食品残さ、農業用廃ビニール等のリサイクル利用の実践と工夫
 籾殻の活用：施設園芸で最も警戒が必要な連作障害を防止するため、組成を吟味した良質な籾殻堆肥を部会マニュアルに従い各自で作成し、2 t / 10 a 以上施用している。

- (3) 温室効果ガスの排出の抑制等を含む先進的な環境保全型の農法の実践と工夫

ア. 適地適作の実践

夏の昼夜温の日較差が大きい特性を活用し、雨よけ夏秋作型の確立を図っている。

イ. 低温期の肥大管理

生育後半（10月中旬以降）の果実肥大を促進するため、生育期終盤に葉を大胆に摘除する強整枝栽培を導入し、加温にたよらずに収穫後半まで高い品質を維持している。

- (4) 持続的な環境保全型農業の実践と経営確立

大江トマト倶楽部は、栽培歴が比較的浅く、規模の小さい新興トマト産地であったが、環境保全型農業への取り組みをとおして、夏秋産地では県内有数の高単収（10 t / 10 a 以上）を上げるまでになっている。また、トマト生産をとおして技術的な信頼が高いことから、トマト以外のたらの芽、促成アスパラガス等、地域農業の新しい動きにトマト倶楽部のメンバーが関わっている。

3. 周辺等への影響力・普及力

- (1) 創造性・地域的な影響力

平成13年6月に6名全員が県内初のエコファーマーとして認定を受け、近隣産地から一躍注目を集めた。これを契機に大江町では、大江ぶどう部、大江西瓜部、大江茄子部、枝豆部会大江支部、大江促成アスパラガス部会、大江桃部、大江南瓜部会の8部会会員全員がエコファーマーの認定を受けており、エコエリア大江町推進協議会が設立された。現在、大江町のエコファーマーは平成20年3月末現在149名となっている。

- (2) 消費者等との交流、食農教育・環境教育への参画等を通じた地域の活性化と地域社会発展への貢献

トマト倶楽部では、実際の消費者と密接に相互交流をすることに力を入れており、町、JA、生協と連携して、年2回程度、各50名程度の消費者を受け入れて現地ほ場を案内しながら交流を続けている。一方的に消費者の意向を取り入れるだけでなく、自分たちの努力やアイデアを積極的に消費者に示し、信頼を持ってもらうことが大切と考えている。

こうした方向の一つとして、エコファーマーの表示に加え、現在は生産者一人一人の名前入り似顔絵ハンコを作り、出荷箱に押しつけて出荷している。また、会員の紹介や生育状況などを記載したトマト通信を年4回発行している。

(3) 地域の農業資源保全と活性化

・新卒就農者、Uターン就農者に対し積極的にトマト栽培を勧誘するとともに、栽培技術はもちろん、施設の導入計画等の経営面でも指導を行ってきた。

4. その他特記事項

経営上の特徴

- ・一戸あたりの栽培面積が大きいため、地域内の雇用を積極的に行っている。
- ・育苗については、当初全量を購入していたが、自家育苗を行い、接木をして育苗費の軽減を図っている。
- ・出荷計画や値決めの交渉等については、トマト倶楽部の役員が主体的に交渉を行っており、自主性の高い出荷組合としての力を流通販売でも発揮している。

5. 取組の成果と展望

当初、トマト栽培の作型の変更による研修、検討から始まった取り組みは、「適所適作」、「土作り」、「長期出荷」へと集約され、それが会員全員のエコファーマー取得へとつながった。また、この取り組みが契機となり、大江町では現在、大江トマト倶楽部を筆頭に、大江ぶどう部、大江西瓜部、大江茄子部、枝豆部会大江支部、大江促成アスパラガス部会、大江桃部、大江南瓜部会の8部会会員全員がエコファーマーの認定を受けており、エコエリア大江町推進協議会が設立された。現在、大江町のエコファーマーは平成20年3月末現在149名となっている。

今後も、清冽な水と澄んだ空気の恵みを受けながら、更に環境にやさしいトマト作りを進める。